

Ⅱ 調 査

1 周 辺 の 遺 跡

調査地は、国道368号線(大宮通)の南約300m、国道24号線バイパスのすぐ東にあり、平城京条坊では、北を三条大路、西を東一坊大路でかくす左京四条二坊一坪にあたる。近年、近鉄新大宮駅を中心とした市街地化は急速に進み、それに対応して、発掘調査の事例も増加の一途をたどっている。調査地周辺にも開発の波はおし寄せ、左京四条二坊においても、いくつかの発掘調査がおこなわれている。

左京四条二坊は、その東半部が藤原仲麻呂の田村第推定地にあたる。そのなかで、十五坪については、坪北半部のうちの南半の一部を当研究所が、1982年と1984年の2次にわたって発掘調査をおこなった。その結果、平城京の邸宅跡では稀な礎石建物2棟をはじめ、掘立柱建物12棟、掘立柱塀8条など、多数の遺構を検出した。建物配置には、5時期の変遷が認められ、礎石建物が出現する奈良時代中葉以降は、少なくとも2町(以上)の邸宅であったことが明らかになった。また、北の十六坪では、坪の西南部において、1983年に奈良市教育委員会が調査をおこない、掘立柱建物5棟などを検出している。三坪では、1983年に当研究所が東北部の一面を調査した。掘立柱建物9棟、掘立柱塀2条などを検出し、奈良時代中頃から後半にかけては、少なくとも坪の北東1/4町を占める宅地となり、東西棟の主殿とその西南に南北棟の脇殿の建つことが明らかになっている。七坪は東二坊坊間路をはさんで田村第推定地に面しているが、坪の東辺の2個所において奈良市教育委員会が1983年、1984年に発掘調査をおこなった。東二坊坊間路の西半とその西側溝、掘立柱建物6棟のほか、坪の東辺を限る築地やそれをつくりかえた掘立柱塀などがみつまっている。

以上が左京四条二坊における発掘調査の概略であるが、隣接する北の左京三条二坊は、平城京内でもっとも多く発掘調査がおこなわれている坊である。なかでも六坪は、特別史跡に指定された宮跡庭園のところで、1975年から1980年にかけて3次にわたって当研究所が発掘調査を実施した。奈良時代の園池を中心に、建物群を配置した1町(以上)の規模をもつ宅地である。その西の三坪は、1983年に奈良市教育委員会が中央北寄りの部分を調査し、掘立柱建物の一部を検出した。また、これと近接して中央南寄りの部分を、当研究所が同じ1983年に調査した。掘立柱建物8棟、掘立柱塀4条などを検出し、5期にわたる建物配置の変遷が明らかになった。と同時に、奈良時代前半～中頃を中心に、1町規模の宅地であったことが判明した。調査地と三条大路を隔てて向かい合う四坪は、1986年に当研究所がその北辺部の調査を実施した。三坪と四坪の坪境小路およびその南北両側溝とともに、掘立柱建物3棟などを検出した。限られた調査範囲ではあったが、坪を東西に二分する位置に掘立柱建物があり、すくなくも1/2町(以上)の規模をもつ宅地であった可能性が強い。このほか、1町規模の宅地である九坪、十五坪などの調査例も含めて、左京三条二坊は、坊内の様子がかかり明らかになっている。

3次の調査 左京四条二坊一坪においては、当研究所が1983年から1986年にかけて、3次にわたって発掘調査を実施した⁹。第1次調査は、1983年社屋建設に先立って坪の西南部において、第2次調査は、1984年ホテル建設の事前調査として坪の北中央付近で、それぞれ実施した。第3次調査は、駐車場建設に伴う事前調査で1986年、第2次調査地の東に接し、南北に長く坪を縦断する形でおこなった。各調査の発掘面積は、それぞれ約650㎡、約790㎡、約1070㎡で、すべてを合わせても坪全体の2割に満たないが、左京四条二坊のなかでは建物配置の変遷や宅地の状況などが、もっとも明らかになった。第1次調査、第2次調査については、その成果をすでに公刊しているが、第3次調査の成果によって、そのなかで推定した遺構変遷やその配置に一部修正を迫られた。なお、いずれの調査においても、奈良時代の遺構は初頭、前半から中葉、後半の3時期に区分できる。つぎに各調査の概略を、時期区分にしたがって記す。

第1次調査では、奈良時代初頭のおもな遺構として、掘立柱建物2棟と掘立柱塀1条を検出した。建物はいずれも小規模で、発掘区西南隅に4間(以上)2間の東西棟建物S B 2582と発掘区北方に4間2間の南北棟建物S B 2605があり、後者には、東に4間の南北塀S A 2604がともなう。奈良時代中葉には、掘立柱建物2棟と掘立柱塀1条がある。発掘区中央付近に東西塀S A 2590、その南4.5m(15尺)を隔てて、東に東西棟建物S B 2580、西に南北棟建物S B 2585が、北妻柱筋と北側柱をそろえて建っており、計画的に配置していることがわかる。S A 2590は、柱間寸法にばらつきがあるが、平均すると2.65m(9尺)で9間分を検出した。S B 2580は、桁行5間、梁間2間の身舎に南廂がつく。柱間は、桁行2.65m(9尺)、梁間2.85m(9.5尺)である。S B 2585は、西側柱の西半が発掘区外になるが、廂はつかないと考えられる。桁行5間梁間2間で、柱間寸法は桁行の南2間が2.6m、北3間が2.8mで梁間は2.8m。奈良時代後半の遺構としては、5条の掘立柱塀、井戸、回廊のほか多数の土塼がある。井戸S E 2600は発掘区中央付近でみつかった平面八角形の井戸である。八角形にならべた塼の上に木枠を組み上げ、直径1.5m、一辺60cm前後になる。井戸の周辺、一辺約4.5mの方形の範囲には、塼を敷いていた。なお、この井戸の掘削は、奈良時代前半に遡る可能性がある。発掘区東北隅では、回廊S C 2601の西南隅の部分を検出した¹⁰。報告では東西棟建物、概報では南北棟建物と推定したもので、第3次調査の成果から回廊と判明。柱間は3.12m(10.5尺)で柱の直径は36cm前後。回廊の西南隅には、東西塀S A 2608が取り付く。柱間寸法は2.65m(9尺)で6間分を検出した。井戸の東側には4条の南北塀があり、S A 2588とS A 2606、S A 2579とS A 2587はそれぞれ柱筋を揃え、前者は回廊の西側柱筋と揃えている。また、S A 2588の西方には、井戸の掘削とほぼ同時期に、多数の土塼が掘られている。第2次調査では、奈良時代初頭の遺構に、掘立柱建物5棟、掘立柱塀3条、溝1がある。掘立柱建物のうち4棟は、第3次調査の成果から南北棟であることが判明した。発掘区南寄りのS B 3007は、桁行4間、梁間2間で、柱間寸法は2.5mである。発掘区中央付近のS B 3008は、桁行5間、梁間2間の身舎に西廂がつく。柱間は、桁行、

梁間とも1.8m(6尺)で、廂の出は、2.4m(8尺)である。発掘区南半の東辺では、S B 3014、3015の西側柱を、S B 3007の妻通りから東9m(30尺)の位置で検出した。桁行は、それぞれ3間、3間(以上)である。S B 3014は、桁行の柱間が不揃いで、中央間が狭い。発掘区北辺では、東西溝S D 3020とその南に接して東西塀S A 3021を検出した。S D 3020は、坪の北端から1/8(14.8m=50尺)の位置にほぼあたっている。幅約0.7mで12m分を検出。S A 3021は、S B 3008の東側柱筋の線上から東にかけてあり、西には、小さな柱掘形がならぶ。奈良時代中葉では、発掘区中央に掘立柱建物1棟あるのみで、他は空地となっている。7間2間の身舎の四面に廂がつく東西棟建物S B 3009で、柱間は桁行、梁間とも約3m(10尺)である。建物の中心は、坪の東西2等分線の東3m(10尺)にあり、坪北半のほぼ中央に位置する。坪内での占地、建物規模から、中心的建物であったと考えられる。奈良時代後半、同じ位置で、7間2間の身舎の南を除く三面に廂がつく東西棟建物S B 3010に建て替えられる。S B 3010は、桁行の柱間と廂の出が約3m(10尺)で、梁間の柱間は約3.6m(12尺)となる。柱掘形は、一辺1.5m前後と大きく、また柱掘形の底を版築状につき固めた後、再び掘って根石をいれて礎盤を置く。S B 3010の南側柱筋から3.9m(13尺)南には、東西棟建物S B 3011の北側柱筋がくる。S B 3011は、柱筋をS B 3010と揃えた7間2間の掘立柱建物で、柱掘形の柱位置には、玉石を敷く。柱間は、桁行、梁間とも3m(10尺)等間である。

第3次調査については、次節で詳しく述べるが、正殿を囲む回廊と、その周囲に取り付く南北塀S A 3862や東西塀S A 3863などを検出した。回廊の発見は、従来推定の域をでなかつた一坪の建物配置の復原に貴重な資料を提供するとともに、この坪が、相当身分の高い人の邸宅跡であったことを裏付けていよう。

- 註
1. 奈文研『平城京左京四条二坊十五坪発掘報告 藤原仲麻呂田村第推定地の調査』1985
 2. 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984 P.40~41
 3. 奈文研『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983 P.49~50
 4. 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984 P.28~39
 5. 奈文研『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』(『奈文研学報』第44冊 1986)
 6. 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984 P.15
 7. 奈文研『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』1984
 8. 1986年 当研究所が発掘調査をおこなった。
 9. 第1次調査：奈文研『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』1984
第2次調査：奈文研『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1985 P.47~56
以下、それぞれ報告、概報と略す。
 10. 第1次調査では、2間分しか検出していない。

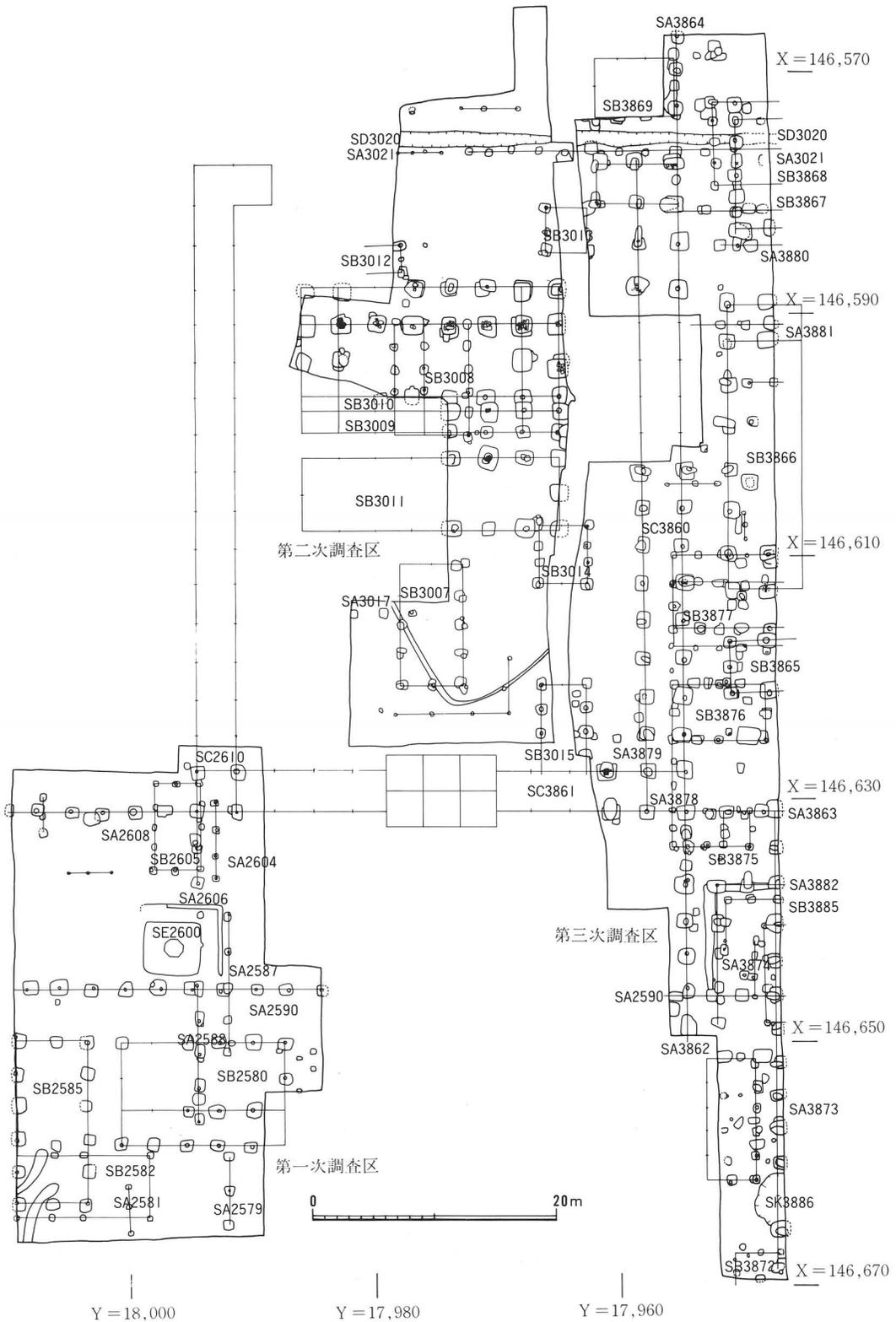


fig. 4 四条二坊一坪遺構図

2 遺 構

層位 発掘区は倉庫跡地では耕土の上に約1mの盛土があるが、その他では水田耕土(15cm)、床土(15cm)、黄褐色粘土ないし茶褐色粘質土と移行する。遺構はすべてこの黄褐色粘土・茶褐色粘質土層の上面で検出した。遺構面の最高所は海拔59.5m前後である。遺構面から約1.5m掘り下げ観察したところでは、この黄褐色粘質土は次第に砂粒分を多く含み、以下粘土層と細砂層が互層状になり、それ以下は灰色荒砂層へと移行した。この間遺物はなく、これらの層が堆積した年代を知ることができなかった。

遺構 検出遺構は、建物跡・回廊跡・堀跡・井戸跡・溝などがある。

これらの遺構は京造営以前に遡る遺構と、平城京の遺構があり、後者はさらに3期にわけられる。

京造営前の遺構

S D 2593 S B 2582の西半部で検出した斜行溝。溝幅は約80cm、黒褐色土の埋土でよくしまり、古墳時代の土師器・埴輪片を含む。

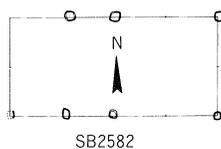
S D 2594 S D 2593と平行する斜行溝である。溝幅は約80cmあり、黒褐色土の埋土でよくしまり、古墳時代の土師器・埴輪片を含む。この溝と同じ埋土の南北構がS B 2580の東北隅付近に重複しており、7世紀代の須恵器が出土している。

S D 3006 やや隅丸方形に曲がる溝で、総長19m分を検出した。溝幅は、約0.4m、検出面からの深さが0.1mである。一部が南北棟S B 3007の柱穴と重複する。年代を決める遺物はないが、この溝の埋土はS D 2593・2594と類似していることからこの時期におく。

S K 3022 南北棟S B 3008の身舎部分で検出した。径が0.5m、深さが0.2mの小土壇で古墳時代の高杯破片が出土した。

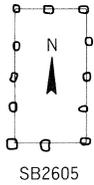
京の遺構

I 期の遺構



S B 2582 S B 2585と重複する東西棟建物。桁行4間分を検出したが、西の妻が未検出であり、さらに西にのびる可能性がある。梁間は2間である。柱穴はのちの整地によって一部が削平されているが、7カ所を検出。一辺40cmほどの隅丸方形である。

S B 2605 桁行4間梁間2間(以下桁行・梁間の語を略す)の南北棟建



SB2605

物。柱間は桁行が1.6m から 2 m とばらつきがある。梁間は1.6m ～ 2.2m。東西堀 S A 2608 の柱掘形に切られる。建物の軸線は、北で東にすこし振れる。

S B 3007 4 間 2 間の南北棟建物。柱間は 2.5m (8.3尺) 等間。柱はすべて抜き取っている。平城宮 I の転用硯が柱穴から出土した。

S B 3008 S B 3007 と柱筋を揃える 5 間 3 間、西に廂をもつ南北棟。北の妻柱穴は、S B 3009・3010 により壊されている。柱間は、桁行と身舎の梁間が 1.8m (6 尺) 等間、廂の出が 2.4m (8 尺) である。柱穴には抜き取り痕跡がある。西側柱筋は、ほぼ一坪の東西 2 等分線上にある。

S B 3012 東西棟の東側梁行部分のみ検出。あるいは堀か。

S B 3013 南北の妻柱が未検出だが、2 間 2 間の建物であろう。側柱の掘形はかなり大きい、妻柱のそれは小さく浅い。また梁間寸法も北から 1.7m、2.1m と不揃いである。

S B 3014 3 間 2 間の南北棟建物。柱間は桁行が 2.8 から 3 m と不等。南北両妻柱は未掘部分にかかり未検出。梁間総長は 4 m。

S B 3015 S B 3014 の南 8.4m にあり、これと柱筋を揃える南北棟建物。桁行は 3 間分を検出、南妻柱未検出のため、3 間か、それ以上になるのかは不明。桁行は 2.1m (7 尺) 等間。奈良前半期の転用硯が北の妻柱穴より出土。

S B 3071 5 間 2 間の南北棟建物。西側柱は未検出。桁行、梁間とも 2 m (6.7尺) 等間か。

S B 3072 S B 3871 の南で西北の一部を検出した建物。規模不詳。

S B 3073 3 間分の柱穴を検出。柱間は 2.7m 等間。建物方位不詳。

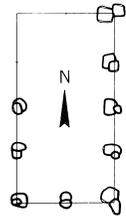
S B 3875 4 間 2 間の東西棟。東 1 間目に間仕切がある。桁行柱間は 1.5m から 2.2m まで不揃いである。梁間は 1.5m 等間。

S B 3876 4 間 2 間の東西棟建物。回廊や S B 3865 に柱穴の一部が切られる。柱間は桁行が 1.8m (6 尺) 等間、梁間が 2.4m (8 尺) 等間である。

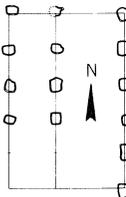
S B 3877 桁行 5 間以上、梁間 4 間の二面廂東西棟建物。柱間は、入側柱が 1.7m から 2.1m とばらつきがある。身舎の梁間は 1.8m (6 尺) 等間だが、南側の廂の間は 1.5m (5 尺)、北側の廂の間は 2.4m (8 尺) である。身舎の西妻から 3 間目に間仕切がある。

S A 2581 S B 2582 に重複する南北堀。2 間分を検出した。

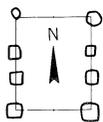
S A 2604 S B 2605 の東 1.3m の南北堀。4 間分を検出。



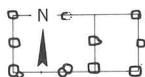
SB3007



SB3008



SB3014



SB3875

S A 3016 S B 3007の南2.2mにある東西塀。3間分を検出、柱間は3m～3.2mである。柱掘形は小さく、仮設の塀であろうか。

S A 3881 S B 3866に重複する東西塀2間分を検出。

S A 3874 S B 3873の西1mにある南北塀3間分を検出。

S A 3878 S B 3875・3876の西妻をつなぐ2間の南北塀。

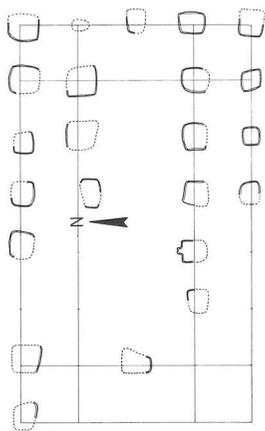
S A 3879 S B 3015・3876の間の3間の目隠塀。

S A 3017 1間の東西塀。S B 3007に伴う施設か。

S A 3021 東西溝S D 3020に接する東西塀。10間分を検出。柱間は1.7mから2.4mまで不揃いである。S B 3008の東西中軸から東3.3mのところまで途切れている。次のS D 3020から宅地への入口か。

S D 3020 S B 3009の棟通りから18m (60尺)北にある東西溝。宅地の北辺を画す坪内道路の南側溝であろう。幅0.7m。

Ⅱ期の遺構



SB3009

S B 3009 7間4間の四面廂東西棟建物。柱掘形のおおくは、同位置に建替えたS B 3010の柱穴と重複する。柱掘形は比較的大きく、一边が身舎部分では0.7～0.8m、廂では0.5～0.6mである。柱間は桁行・梁間とも2.96m (10尺)等間。建物規模は桁行総長が約21m、梁間総長が約12mとなる。

S B 3009の東西の中心は、一坪の東西2等分線の東3m (10尺)にあり、棟通りは坪の北から33m (110尺)の位置にある。

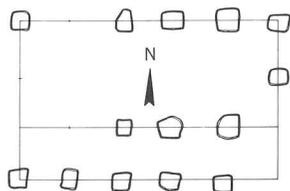
その位置と建物規模からみて、この時期の中心建物である。北入側柱穴から平城宮Ⅱ (730年頃)・Ⅲ (750年頃)の土器が出土した。この時期の年代を決める手懸りである。

S B 2580 5間3間、身舎に南廂のつく東西棟建物。柱掘形は後世の破壊により一部のみ検出。掘形は方約80cm。その多くには抜き取り痕跡がある。検出面から柱穴の底まで深さは、身舎が40cm、廂が10cmほど。柱間は桁行が2.65m (9尺)、梁間が2.85m (9.5尺)。

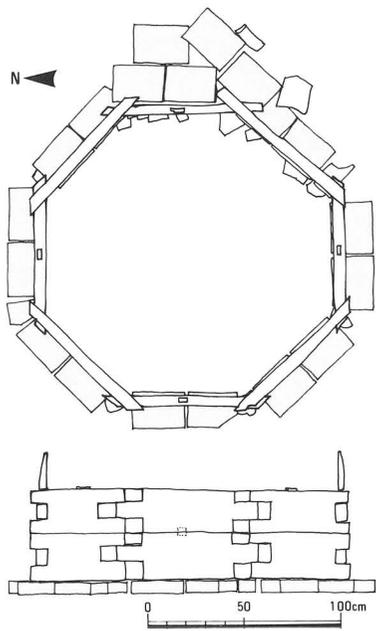
S B 2585 5間2間の南北棟建物。S B 2580の北側柱と北妻柱筋を揃える。建物の北東部分は土壌S K 2615や後の整地により破壊。柱間は桁行の南2間が2.6m、北3間が2.8m。梁間は2.8m。

S B 3865 正殿S B 3009の東南にある桁行1間以上、梁間2間の東西棟建物である。建物東側が発掘区外になるため、規模は不詳。S B 3866の西側柱筋と梁行を揃える。桁行の柱間は3.0m (10尺)等間。

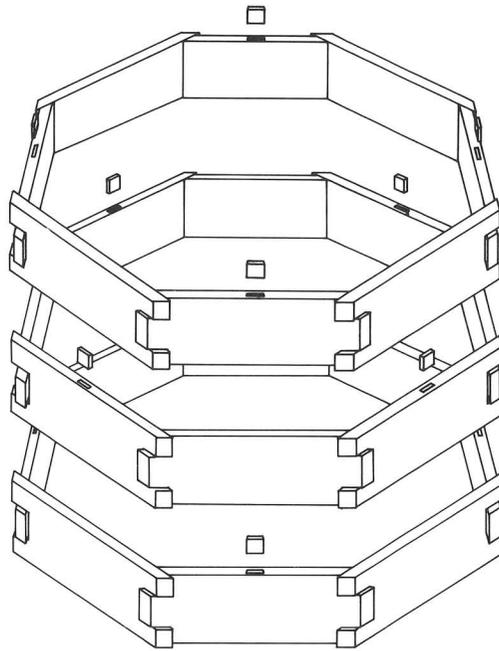
柱はすべて抜き取っている。柱掘形がやや深く、柱抜き取り穴の



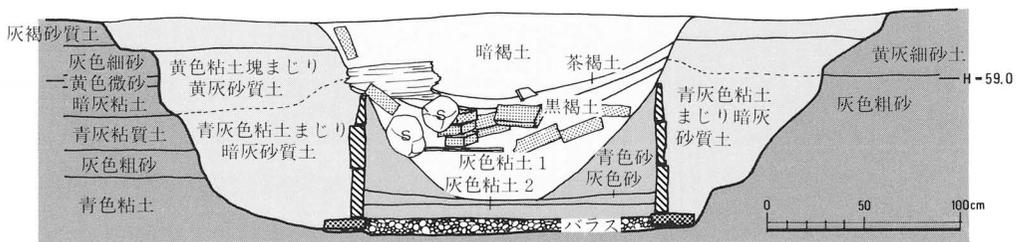
SB2580



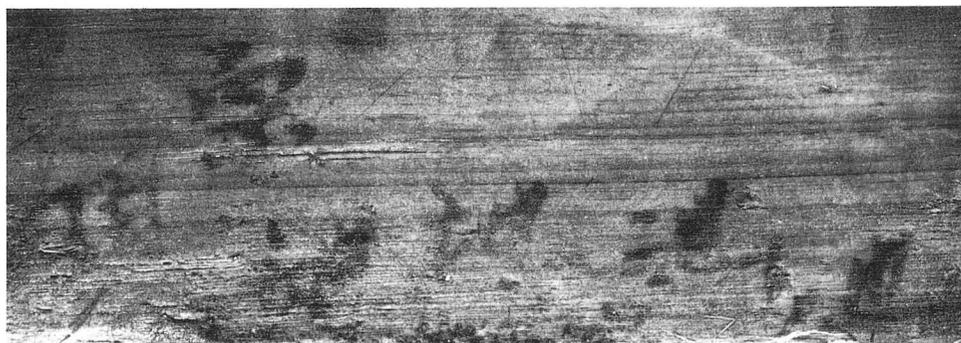
a. 井戸枠実測図



b. 井戸枠組上模式図

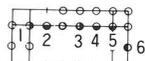
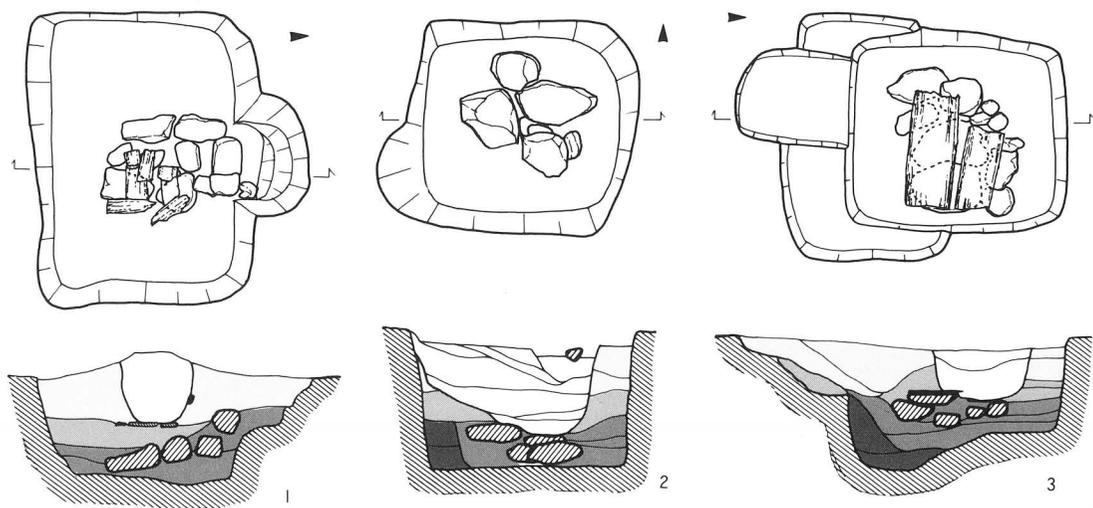


c. 井戸SE2600断面図 (左：北、右：南)

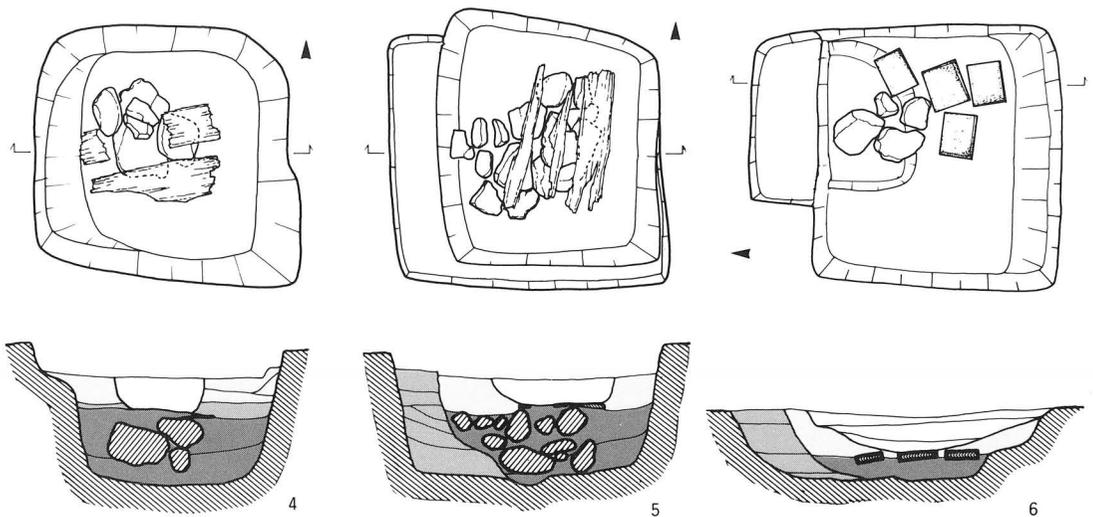


井戸枠の墨書

fig. 5 井戸実測図と組上図



SB3010



H = 59.70 m

fig. 6 建物SB3010柱穴地業図

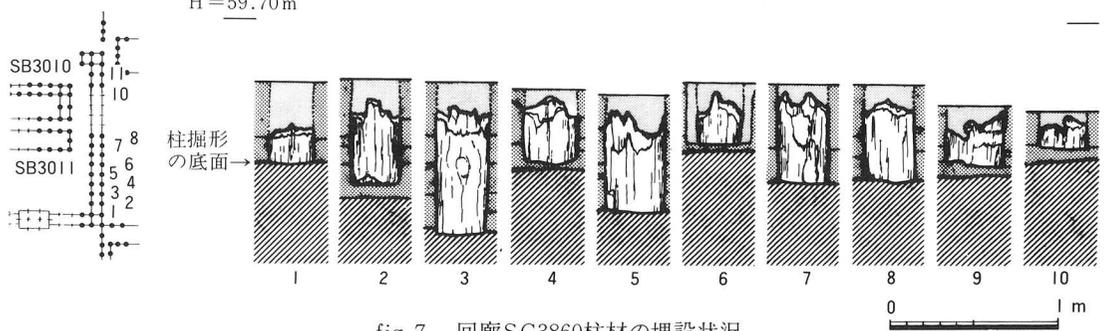
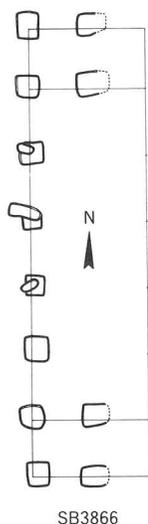
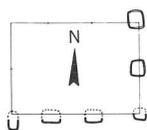


fig. 7 回廊SC3860柱材の埋設状況



SB3866



SB3869

一部に石を捨てる特徴が、S B 3009・3865などと共通する。

S B 3866 S B 3865の西妻と西側柱を揃える7間2(?)間の南北棟建物である。南北に各1間の廂をもつ、やや特異なかたちの建物である。身舎部分の桁行は3.55m(12尺)、廂部分と梁間は2.96m(10尺)間である。従って、桁行総長は23.68m(80尺)になる。柱はすべて抜き取っている。

S B 3869 3間2間の東西棟。柱間はやや不揃いで2.7m~2.8m。

S A 2590 一坪を南北に画する東西塀。一次調査で9間分、3次調査で3間分を検出した。柱間は一部にばらつきがあるが、ほぼ2.7m(9尺)等間である。正殿3009の南は未発掘区で詳細は不明であるが、ここに門が開いていたのであろう。京内の大規模宅地の例から、この「門」を仮に9尺等間の3間2間の門とすると、門へのとりつき部の柱間は1.8m(6尺)間になる。検出したS A 1290の柱穴14カ所のうち4カ所には柱根が残る。柱径は24~30cm。この塀は、坪の南北4等分点の南から1番目の位置にある。

S B 3885 発掘区の東端で南北5間分の柱穴を検出。詳細は不明であるが、S A 2590の柱掘形と共通性があり、南端でこの塀にとりつく南北棟建物と考えておく。柱間は3mから3.2mとやや不揃い。

S A 3870 S A 2590に直交する南北塀。一部土壌に重複するが、8間分を検出した。柱間は2.7m~2.8mである。S B 3885と柱筋が揃うので、両者を同一の塀とすることも可能だが、S A 2590を境に柱間寸法が若干違い、別の遺構とした。東側が発掘不能なので詳細をあきらかにしがたい。

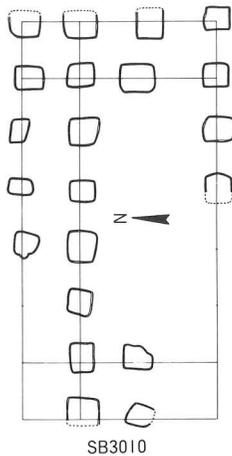
S E 2600 直径1.5m、一辺59.5~64.5cm、深さ1mほどの平面八角形の井戸。塀を八角形に並べ、その上に木柵を八角形に組み上げる。木柵は下から三段目までほぼのこり、四段目が三辺に一部のこる。下一段目は高さ25.5cmと揃うが、二段目から高さは不揃い。板の厚さは6cmほど。各辺の組み合わせは東西南北の4辺は両端を凸形とし、斜辺は両端を凹形として、凸部を挿入し八角形に組む。上下の木柵は4辺ずつ交互に太柄で固定し、ずれを防ぐ。太柄の位置は一段目と二段目の間では東西南北の四辺、二段目と三段目の間では斜辺に置き、段ごとに互い違いとする。太柄は柵板の上面ほぼ中央にあり、6×6cm、厚さ2.5cm。井戸底には塀が隠れる高さまで小砂利を敷きつめる。塀の下には一部に瓦をかませる。塀の上端面を水平に揃えるためであろう。

井戸枠の外側1.5~1.7mに浅い凹みがある。この凹みは、高低差約10cmで井戸を囲む1辺約4.5mの方形をていする。井戸の周辺に埴を敷いた痕跡ではなからうか。

掘形埋土の遺物から、井戸の掘削は天平年間、その廃絶期は井戸底や上層の遺物からみて、奈良末から平安初期に比定できる。

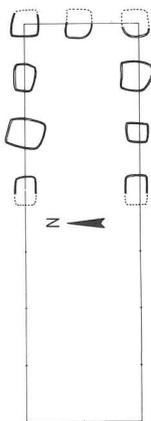
井戸の裏ごめでは、木枠に接して小さな棒片が各辺で発見された。棒片は、垂直に近い状況や横になった状況で木枠にへばりつくもの、ややはなれるものなどがあり一様ではないが、井戸開削時の祭祀に関連したものと思われる。こうした例は、平城京跡では始めてであろう。なお、井戸枠の東1段目の外面に下記の墨書がある。

「可
宗 □
□
(顕カ) 池池池池□□人□□」



Ⅲ期の遺構

SB3010 SB3009の北側柱位置に揃えて建替えた7間3間の東西棟建物である。南を除く三面に廂をもつあまり例のない建物。柱間は、桁行と廂の出がSB3009と同様に2.96m(10尺)等間だが、身舎の梁間部分が3.55m(12尺)等間である。3010と3009は、北側柱と入側柱の柱穴が完全に重複している。SB3010の柱掘形は一辺が1.5m前後と大きく、一部に特殊な地業を行う。典型的な例でみると、柱掘形を一度深さ約0.8mまで掘り下げ、版築状につき固めながらある程度埋め戻した後、再度掘り下げて玉石をいれ、その上に木の礎盤を敷き、柱を立てるものである (fig. 6)。この場合、根石をいれる掘形を、抜き取り穴のように柱掘形の外側から掘りこむ例 (fig. 6-1・3) や、板を根石の代りにする例 (fig. 6-4) などがある。柱はすべて抜き取っている。上の工法は北の入側柱・側柱筋に顕著であるが、南側柱筋ではみられなかった。



SB3011 7間2間の東西棟建物で、柱間は桁行、梁行とも2.96m(10尺)等間で、SB3010と南北に柱筋を揃える。柱掘形は一辺0.8mから1.8mの超大型のもまでであるが、浅い。柱位置には玉石を敷き礎盤とする。SB3010と同様、この上に木の礎盤を置いた可能性もあるが、その痕跡は残っていない。掘形の底面が乾燥していたためか、柱はすべて抜き取っている。

なお、S B 3011の棟通りは、次の回廊の南北中軸線に一致する。

S B 3011はS B 3010の南約3.9m (13尺)にあり、2棟の建物はいわゆるならび堂として、一体として使われたのであろう。

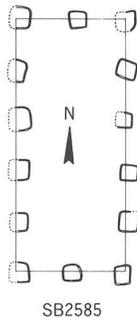
S C 3859～3861・2610 正殿S B 3010を囲む回廊である。これは、第1次調査では東西棟建物に、第2次調査では南北棟建物に復原したものであるが、第3次調査によって梁間1間の回廊と判明した。南面回廊(S C 3859)は4間分を、東面回廊(S C 3860)は13間分を、北面回廊(S C 3861)は2間分を検出した。これらの調査の成果によって、回廊はS B 3010・S B 3011の南・東・西を囲むものの、北は各2間のみで、北面全体を囲まない形であることが判明した。検出した建物規模は、東西39.9m、南北53.3mである。東西と南北の比は約1:1.3となる。

回廊の柱間は、桁行、梁間とも3.1m前後が多いが、3.0m～3.6mまでばらつきがある。柱掘形は、小さなものでも方0.7m、大きなものでは1.2mほどで、大半が1mを越す大きなものである。検出した柱穴の約1/3、13カ所には柱根がのこっていた。断ち割り調査によると、検出面からの柱穴の深さはまちまちである(fig. 7)。遺存状態の良い柱根を、年輪年代学の方法によって判定したところ、遺構の推定年代を100年ほど遡る年代値を得た。回廊は転用材によったのであろうか。

柱掘形の一部には、正殿S B 3010と同様に石や塼、木の礎盤がみられた。南面回廊は、東西各々2間を検出した。中心部の門の推定地は未発掘地であり、門の規模は従来の京内調査の成果に照らして3間2間と想定しておく。東面回廊は、13間分を検出した。北面回廊の梁間にあたる部分の柱間は3.5m、そこから2間南の柱間は3.6mと他より広い。回廊を横切る通路であろう。回廊の基壇や雨落溝の痕跡は未検出である。後世の削平によるのであろう。なお、回廊周辺の屋根瓦の出土は少なく、屋根は檜皮葺の可能性が高い。

以上から回廊の計画寸法を考えてみよう。すでに述べたように、回廊の建物規模は東西39.9m、南北53.3mである。これは1尺=0.296mとした時、各々135尺、180尺という完数が得られる。次に、これをいかに割りつけたかが問題となる。東面回廊は検出した柱間が13間であるが、柱間寸法からみて、南北は17間であろう。

北面回廊から南3間目には柱間が3.6mの小規模な門を想定したので、南北長39.9mからこの柱間をひいた数値を残る間数16で除すと、



3.12mとなる。この値は、1尺=0.296mの10.5尺にあたる。回廊は3.12m (10.5尺)を基準として柱間を決めたのであろう。

南面回廊は東西4間分のみ検出したが、中央の門を3間2間とし、それにとりつく回廊の柱間が等間とすると、門の建物規模は東西8.7mとなる。この門の桁行が等間なら、2.9m (約9.8尺)間となる。南面回廊の規模に関しては将来の調査の進展に期待したい。

回廊の施工は比較的雑であったようである。その一端は、上の柱間寸法のばらつきなどにみるが、より大きくは回廊全体のゆがみや、回廊と正殿S B 3010の中軸線のずれとして表われている。すなわち、東面回廊の梁間は南端で3.12m、北端で3.4mと、やや北が広がっている上に、東側柱の南北軸線は方眼方位に対し、約18分西偏している。西面回廊S C 2610は1間分を検出したのみで、南北軸線の振れは不明だが、現状から推定するかぎり、回廊は北端で内側に狭まっていた可能性がある。また回廊東西の中軸線と、正殿S B 3010の中軸線のずれは0.7mであり回廊の中軸線は、正殿S B 3010の中心軸の西0.7mにくる。

S A 2579・S A 2587 西面回廊S C 2610の南、同一軸線上にある南北の目隠塀。S A 2579は2間分、S A 2587は4間分を検出。柱間は2.8mである。二条の塀は、次のS A 2588・2606を補うもので、S A 2587は、井戸S E 2600の目隠塀であろう。

S A 2588・S A 2606 西面回廊S C 2610の西側柱に取りつく南北塀である。S E 2600の東の部分で途切れ1間のS A 2606と、8.4mの間隔を置いて4間のS A 2588がある。ともに柱間は2.8m (9尺)。回廊と同様に、柱根を残すものがある。

S A 3862 S A 2608と東西対称の位置、東面回廊の南にあって回廊東側柱に筋を揃えた南北塀。6間分を検出。回廊との取りつき部には造り替えがある。当初、この塀は回廊に接したが、次の時期に、回廊から1間目の柱を撤去し、柱間3mの1間門S B 3890を設ける。そのため、回廊と回廊より2間目の柱との柱間は1.5m (5尺)とした。この塀も、検出した柱掘形8ヶ所のうち、3カ所に柱根がのこっていた。柱掘形の状況は、回廊の場合と類似している。

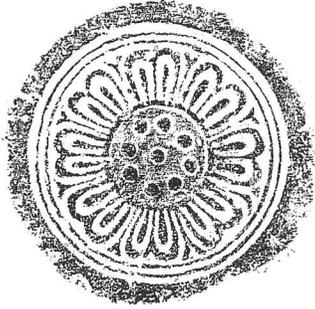
S A 3864 S A 3862と南北対称位置の南北塀。2間分を検出。柱間は2.7m (9尺)等間。回廊との取りつき部は4.7m (15.6尺)。これはあと1間分北にのび、三条大路に面した築地塀にとりつくのであろう。この柱掘形も、3カ所のうち2カ所に柱根が残る。

- S A 2608** 南面回廊の南側柱の西からのびる東西塀。5間分を検出。柱間は若干のばらつきがあるが、ほぼ2.7m(9尺)等間。
- S A 3863** 南面回廊の南側柱の東からのびる東西塀。3間分を検出。柱掘形が一辺1m程のもの、半分程度のものが交互にあるので、S A 3862と同様に、造り替えの可能性がある。
- S A 3882** S A 3862の東2.5m、S A 3863の南5.6mにある逆L字型の塀。南北部分は4間分、東西部分は2間分検出。柱間は、南北部の南3間が2.7m(9尺)間、他が3m(10尺)である。東西2間は1.5m(5尺)等間である。
- S D 3883** S A 3882の柱の間をつなぐ溝。重複関係からは溝が柱掘形を切るが、工程の差か。
- S A 3884** S A 3882と約0.7m離れる鍵の手に曲る塀。東西南北とも2間分を検出。S A 3882の柱掘形と重複するが、柱掘形が小さく、補助的な塀か支えの一種であろうか。
- S A 3891** 東回廊の東4.6mにある4間の南北塀。南北棟建物か。
- S K 3886** S A 3870の柱穴を切って掘られた直径約4mの土壇。深さ0.4~0.5m。軒瓦6314や、土器などが出土。京廃絶後の土壇。
- S K 3887** S B 3871に接する0.7m×0.5mの小土壇。軒瓦が出土。
- S K 3888** S A 3874とS A 3882との間の小土壇。
- S K 3889** S B 3886の側柱に近接する小土壇。軒瓦6316が出土。

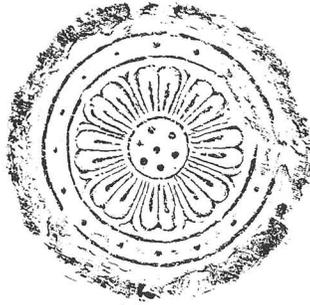
tab. 1 建物規模一覧

遺 構	横方向	規 模	廂	桁行規模	梁間規模	廂規模	
Ⅰ期	SB2582	東・西	4 ? × 2		10.8~	5.1	
	SB2605	南・北	4 × 2		7.2	3.7	
	SB3007	南・北	4 × 2		10	5	
	SB3008	南・北	5 × 3	西	99.2	5.1	2.4
	SB3012	東・西	東妻のみ				
	SB3013	東・西	2 × 2		3.7	3.8	
	SB3014	南・北	3 × 2		4.9	4	
	SB3015	南・北	3 ? × 2		5.8~	3.7	
	SB3071	南・北	5 × 2 ?		10.0	?	
	SB3072	?	? × 2 ?				
	SB3073	?	3 × ?		8.1	?	
	SB3875	東・西	4 × 2		6.4	3	
	SB3876	東・西	4 × 2		7.2	4.8	
	SB3877	東・西	5 ? × 4	南・北	7.8~	7.5	南1.5 北2.4
	Ⅱ期	SB3009	東・西	7 × 4	東西南北	20.7	11.8
SB2580		東・西	5 × 3	南	13.3	5.7	
SB2585		南・北	5 × 2		13.6	5.6	
SB3865		東・西	? × 2			4.2	
SB3866		南・北	7 × 2	南・北	23.7	5.9 ?	
SB3869		東・西	3 × 2		6.5	4.8	
SB3885		南・北 ?	5 × ?		15.3		
Ⅲ期	SB3010	東・西	7 × 3	東西北	20.7	10.1	
	SB3011	東・西	7 × 2		20.7	5.9	
	SC3859		8 ? × 1		39.9		
	SC2610					3.2	
	SC3860		17 × 1		53.3	3.1(南端) 北端(3.4)	
	SC3861		2 × 1		6.7	3.5	

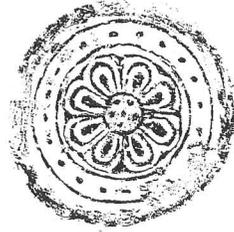
小数第2位四捨五入 単位m



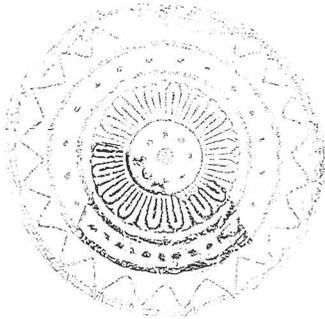
6227D



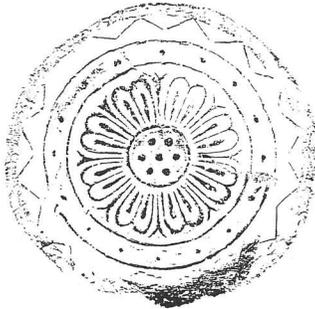
6308A



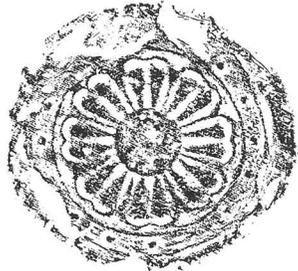
6314B



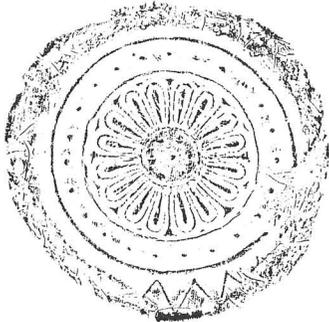
66821a



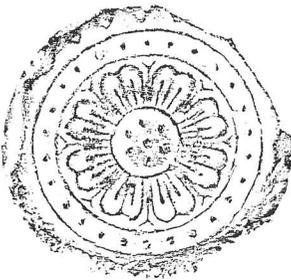
6308B



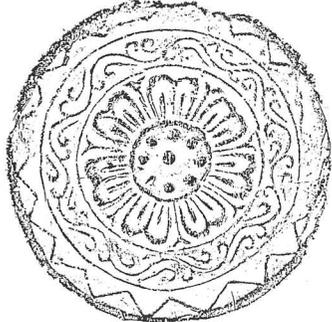
6316G



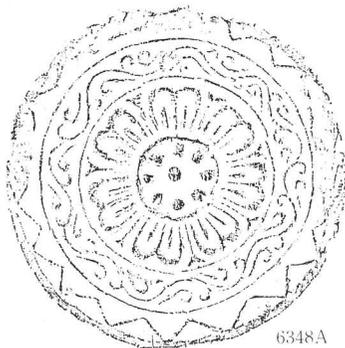
6285A



6311A



6348A



6348A

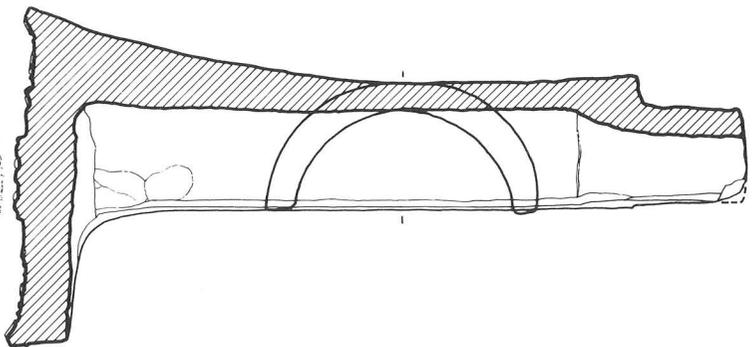


fig. 9 軒丸瓦実測図 1:4